

関東大震災と朝鮮人虐殺

倉 持 和 雄

はじめに

このところ大きな地震が国内外で起こり、改めて自然の威力の恐ろしさを再認識させられている。国内では2004年10月23日の夕刻、新潟中越一帯を直下型の地震が襲った。上越新幹線が脱線したが、幸いにも乗客にけが人はなかった。がれきの下の乗用車に閉じ込められた母子の救出作業は生中継され、人々は固唾を呑んで見守った。2歳の男児が4日ぶりに救出されたが、母親と3歳の女兒は、結局、助からなかった。同じ年、海外ではクリスマス休暇中の12月26日、スマトラ島沖の巨大地震で津波が発生し、インドネシア、タイ、スリランカ、インドなど周辺国の海岸を襲い、この4カ国の死者・行方不明者の総数は28万人にものぼった¹。余りの被害の大きさに啞然とさせられた。

さて本稿は標題のように80年以上も前の関東大震災を取り上げた。あとで詳しく述べるように、このときの地震で多数の人々が亡くなった。しかし、関東大震災時に起こった特異なことは、地震という自然災害とは別に、差別意識と偏見によって当時、東京や横浜にいた朝鮮人が多数、殺害されたということである。この関東大震災時の朝鮮人虐殺という悲惨な出来事は、わたしにとって実は特別な意味を持っている。それはわたしが韓国研究に取り組む遠因ともなっているからである。それはこのようなことである。

わたしの父はキリスト教会の牧師であったが、父の牧会した最初の教会

1 朝日新聞2005年3月26日付け記事。

は川崎浜町にある朝鮮人教会であった。浜町の近くには日本鋼管があって、当時、多数の朝鮮人が労働者としてこの地域に居住していた。こんにちもこの一帯は在日韓国・朝鮮人の集住地域となっており、父が牧会した教会があった通りは現在、コリアタウンとして再開発が進められており、多数の韓国焼き肉店が立ち並んでいる。

さて父が何故、朝鮮人を相手にしてキリスト教会の牧師になったかというと、まさに関東大震災時の朝鮮人の受難が関係している。父は東京下町の月島で生まれ育ったが、父がちょうど8歳となる1923年、関東大震災に遭遇し、そこで朝鮮人たちが捕えられていく様子を目撃したのである。その中に、手を針金で縛られ、土管の中に押し込まれた白衣を着たハルモニ（おばあさん）がいて、父をじっと見つめて微笑んだという²。成人して牧師になるため神学校で学んでいた父は、何故か、このおばあさんの夢を度々見るようになった。そして、その夢を「朝鮮人へ伝道しなさい」との神の召命と受け止めたのである。こうして戦時中の1941年に川崎の地で朝鮮人を相手にして伝道を開始した。ただここでの活動は、父が1944年、海軍に招集され、翌年、日本が敗戦し、教会に集まっていた大多数の朝鮮人が帰国することによって幕を閉じてしまった。戦後は横浜で日本人教会の牧師となった父であるが、その後も父は在日韓国・朝鮮人、帰国した韓国人との交流を続けていた。わたしはその父からこうした話をよく聞かされていた。しかし、わたし自身は他の日本人の若者同様、とくに韓国・朝鮮に関心を持ってはいなかった。大学時代、当時の韓国は、朴正熙の政権下にあったが、その反共独裁ぶりが伝えられ、むしろ嫌悪感すら持っていた。しかし、大学院に進学してから、日本経済のあるゼミで「外国の視点から見たその国と日本との経済関係」について共同研究をすることになり、参加者がそれぞれどこかの外国を担当することになった。このとき、わたしは韓

2 父の日撃体験については、その証言をもとにした話が、神奈川新聞社会部（1985）に載せられている。

国を選択したのである。どこの国でもよかったのだが、どうせやるなら父からいろいろ話を聞いていた韓国をやってみようということにしたのである。この選択が結局、その後、わたしが韓国を専門として研究するきっかけになったのである。考えてみれば、父が関東大震災時にある朝鮮人のおばあさんに遭遇したことが、時を経て、わたしの韓国研究に結びついていともいえるのである。そんなことから今回、わたしの韓国研究開始の遠因となったともいえる「関東大震災と朝鮮人虐殺」を調べてみることにしたのである。

1 関東大震災とその被害³

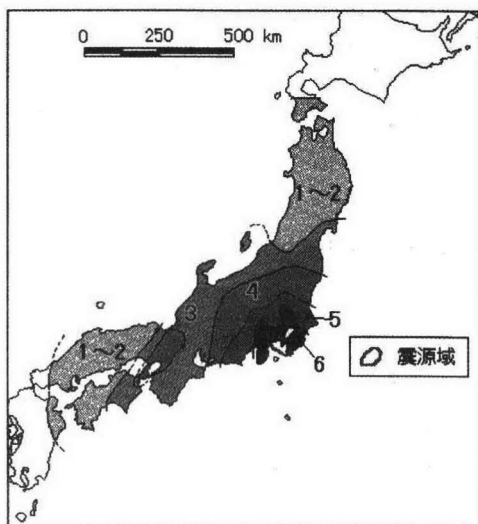
関東大震災は1923年（大正12年）9月1日のお昼時に突然襲ってきた。東京牛込の自宅で、関東大震災に遭遇した旧一高生の酒井佐昌氏は地震体験を以下のように記録している。

「2階でウトウトして起きあがろうとした刹那、異様な響き、大したこともあるまいと思いながら飛ぶように下へ。そのときグラグラと揺れはじめた。おや地震だなと思う間もなく地軸も折れんばかりの大振動。もう止むだろうといつものように平気でいたが普通ではないようだ。屋根瓦は飛ぶ、戸障子は外れる。四辺騒擾、黄塵天日を被う。やっと静まったころ、一同飛んで裸足で庭の隅に逃げた。すると間もなくまた来た。前にも勝る大きな奴。庭に縮こまって見ると、二階は草木のごとく揺れている。自分たちは立っていることもできず、樹にしがみついて頑張った。しかし案外早くおさまったので門外に出てみた。通りは町の人でいっぱい、大通りへ出ると両側の家はほとんど将棋倒し。このとき3度目の大きい揺れが来た。立木にすがってブルブル震えていた。」⁴

3 この頃における関東地震およびその被害について、とくに注記のない場合の情報は東京管区気象台ホームページやフリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』を参考にした。

4 「関東大震災を知る」（鹿島マンスリーレポートダイジェスト2003年9月）、鹿島

第1図 関東地震の震源域と震度



(出所) 東京管区気象台ホームページ

1923年9月1日、関東一帯を突然、襲った関東地震は、11時58分の本震と12時1分のM7.3とM7.2の余震の約5分に渡る三つの地震からなっている。上記の酒井佐昌氏の体験談も三度の激しい揺れを語っている。その後も2日にM7以上の余震2回を含めて多数の大規模余震が続いた。関東地震はフィリピン海プレートの沈み込みによって生じたプレート境界の跳ね返りによるものとされており、これによって発生した津波が地震の数分後、太平洋沿岸地域から伊豆諸島にかけて次々に襲い、熱海で12m、房総半島で9mの高さを記録した。第1図のように震源地は伊豆大島付近から相模湾にかけての地域で、本震のマグニチュードは7.9とされている。房総半島から伊豆半島、関東全域で震度6以上の激しい揺れを観測した。

ホームページより転載。原出典は武村雅之『関東大震災 大東京の揺れを知る』鹿島出版会、2003年。

関東地震による被害を総括すると第1表のようになる。死者と負傷者がそれぞれ約10万人、行方不明者が約4万人、家屋の被害は全壊と半壊が約13万戸、焼失が約44万戸であった。別の統計によると死者約10万人のうち家屋などの焼失を原因とする死者が87%に達したと推定されている⁵。これらの数値からすぐに気がつくことは、人的被害、物的被害、共に火災を原因とするものだったということである。

第1表 関東地震による被害規模

府県名	死 者	負傷者	行方不明	家 屋				
				全 潰	半 潰	焼 失	流 出	計(除半潰)
神奈川県	29,065	56,269	4,002	62,887	52,863	68,569	136	131,592
東京府	68,215	42,135	39,304	20,179	34,632	377,907		398,086
千葉県	1,335	3,426	7	31,186	14,919	647	71	31,904
埼玉県	316	497	95	9,268	7,577			9,268
山梨県	20	116		1,763	4,994			1,763
静岡県	375	1,243	68	2,298	10,219	5	661	2,964
茨城県	5	40		517	681			517
長野県				45	176			45
栃木県		3		16	2			16
群馬県		4		107	170			107
計	99,331	103,733	43,476	128,266	126,233	447,128	868	576,262

(出所) 東京管区気象台ホームページ

地震発生がちょうどお昼時で、各家庭では昼食の準備で火を使用していたため、地震直後から各地で火災が発生した。加えて前日からの強風が残っていて火災は瞬く間に広がった。こんにちとは違って、ほとんどの家屋が木造家屋であったからたやすく延焼してしまったのだろう。さらにこの強

5 「関東大震災を知る」(鹿島マンスリーレポートダイジェスト2003年9月)、鹿島ホームページより。

風と火災が相まって旋風が発生し、このために本所の陸軍被服廠跡地では4万人もの避難者が焼け死ぬという惨事を引き起こした。まるで火炎地獄を想像させる。

もし地震発生が、家庭で煮炊きするお昼時でなかったら、また気象条件も違っていたら、火災による被害はずっと少なく済んでいたかもしれない。もし仮に焼死者数のすべてを死者数から減じたとすれば、死者数は家屋倒壊などによる約1万人にとどまる。しかし、1万人という死者数は、最近、国内でもっとも被害の大きかった1995年1月の阪神・淡路大震災の死者数6,433名と比べてもはるかに多い被害者数である⁶。依然として関東地震が史上最大級の被害をもたらした地震であったことが分かる。関東大震災については多数の写真が残されている。当時の家屋、建物の強度がいまと比べて劣っていたとはいえ、その倒壊ぶりを見ると、関東地震がどんなにか激しいものであったかを想像することができる⁷。

2 朝鮮人虐殺の悲劇

(1) 朝鮮人虐殺の証言

まるで悪夢のような大地震の後、幸運にも命拾った人々の中に、日本の植民地統治下にあった朝鮮の人々がいた。例えば、神奈川県内には1923年末、内務省警保局調べで1,860名の在住朝鮮人がいたとされる。その多くが土建業の「人夫」「土方」など単純肉体労働者であった⁸。異郷の地で今まで経験したことのない天変地異に遭遇し、やっと命からがら逃げ延びた

6 阪神・淡路大震災の死者数は、消防庁「阪神・淡路大震災について（第107報）」（2003年12月25日）、インターネットウェブサイト阪神・淡路大震災関連情報データベースより。

7 私が父から聞いた話によると、「隣の部屋にいた母親（私の祖母）が自分（父）を庇おうと一生懸命来ようとするのだが、まるで酔っぱらいのようにふらついて、近づいて来ることが出来なかった」という。突然の非常に激しい揺れが想像できる。

8 梶村秀樹（1983）、656ページ。

彼らをさらに恐ろしい出来事が襲ったのである。地震直後からどこからともなく、「不逞鮮人が放火している」「不逞鮮人が井戸に毒を入れた」「不逞鮮人が集団で襲ってくる」といった流言飛語が伝わって人々を不安にさせた。これに恐怖・憤慨した住民たちは自警団を組織し、また戒厳令が布かれて軍隊も出動して朝鮮人狩りがおこなわれた。朝鮮人虐殺についてはかなり多数の証言が残っている。いくつかを紹介しよう。まずは、横浜の一住民と警察署長の証言である。

「9月2日午前8時頃、年齢30歳位土方風の一鮮人（男）は、横浜市中村町字打越石川小学校前道路にて、憐寸6新聞50枚を所持し、徘徊し居たるにより、『何にするか』と尋ねしも答えず。間もなく集まり来りし群衆のために、該鮮人は殺害せられたりと。（現認者中村町453石塚亀太郎）（中略）

市内の風説によれば、震災の際、警察署より『鮮人殺害差支なし』との布告を発したりと。（市民風評）

本件の根拠不明なるも、巡査等が、朝鮮人放火等の風評を聞き、『朝鮮人は殺してもよい』位の事を言ひたるに起因するものならんか。朝鮮人が不逞行為をなすとの風評の原因は、不詳なるも、本牧町付近にて鮮人震災の際、夫人を陵辱したりとかにて、是より鮮人の不逞行為の風評流布せらるるに至りたるものの如し。故に風評の程の事もなく、多少の事実はありたるものなるべし。（寿署長の言）」⁹

最初の証言の中で「中村町打越の石川小学校前道路」と場所が特定されて出てくる。わたしは横浜についてある程度土地勘があるので、あの辺だなどと察しが付く場所である。地図で確かめると石川小学校は現存する。その場所で30歳位の一朝鮮人が殺害されたというのである。マッチと新聞紙を持っていたので、放火犯と見咎められたのだろう。問詰されても答えなかったというが、日本語が十分にできなかったのかもしれないし、恐怖

9 横浜市役所市史編纂係編（1927）、35～36ページ。

で言葉を発せられなかったのかもしれない。間もなく群衆によって殺害されたと言うが、普通の一般住民が一撃で人を殺すことなどできないだろう。そうすると群衆が寄ってたかってなぶり殺したのだろうか。自分が知っている場所だけに光景が生々しく浮かんできて慄然とする。

寿署長の言は、実に曖昧で責任逃れの感がある。「朝鮮人を殺してもよい」ということが警察署から発せられたかどうかについて、そんな根拠はないと否定しつつ、しかし、朝鮮人放火の風評で巡査などが言ったかもしれないと否定しきってはいない。そしてその風評について、それが確かとは言えないが、一部には夫人を陵辱したとかの事実もあったようだ、と正当化している。このように寿署長でさえ朝鮮人の風評について不確かであった。しかし、その不確かな風評を根拠に、朝鮮人たちが本当に不法行為をしたかどうかを確認することなく、日本人たちは公然と朝鮮人を殺害していったのである。仮に犯罪行為があったとしてもそれはしかるべき裁判の後に処罰されるべきことである。それなのに警察署から「朝鮮人を殺してもよい」という、これも不確かなのだが、一種のお墨付きがあるということでおぞましい無法行為が白昼堂々とおこなわれたのである。

もう一つの証言は東京での出来事を記したある一兵士の日記からのものである。

「9月3日 雨。午前1時頃、呼集にて、また東京に不逞鮮人がこの機に際し非常なる悪い行動をしつつあるので（井戸に毒薬投入、火災の先だつて爆弾投下、強姦等やるので）、それを制動せしめるため、38騎銃携行、拳銃等も実弾携行し、乗馬でゆくもの徒歩でゆくもの、東京府下大島に行く。小松川方面より地方人も戦々競々とて、眠りもとれず、各々の日本刀、竹やり等を以って、鮮人殺さんと血眼になって騒いでいる。軍隊が到着するや在郷軍人等非常なものだ。鮮人と見るやものも云わず、大道であろうが何処であろうが斬殺してしまうた。そして川に投げ込んでしまう。余等見たのばかりで、20人一かたまり、4人、8人、皆地方人に斬殺されてしまっ

ていた。」（一兵士の日記）¹⁰

朝鮮人が襲ってくるかもしれないと日本人住民は恐怖を覚えたかもしれないが、それでも住民の圧倒的多数は日本人である。むしろより恐怖にののいたのは少数者である朝鮮人たちであつたろう。この東京での出来事についての一兵士の証言を見ると、一部の日本人たちは血眼になって朝鮮人たちを追い求め、見つけるや有無を言わず殺害していたことが分かる。とても尋常なことではない。

朝鮮人が民族服を着ていれば別だが、そうでなければ、見かけだけでは日本人か朝鮮人かを見分けることは難しい。このため自警団は怪しいにらんだ通行人を検問し、「十五円五十銭」とか、「ザジズゼゾ」「パピブペポ」を言わせてみて、うまく言えないと朝鮮人に違いないというような方法をとっていた。朝鮮人にとってこれらは正確に発音することが難しい言葉であつた。しかし、日本人の中にもうまく言えないために朝鮮人と誤認されて殺害されてしまったということまで起こっている。例えば、9月6日に千葉県福田村（現在の野田市）の利根川河畔にあった渡し場（三ッ堀の渡し）付近で、香川県から菓の行商に来ていた一行15人が朝鮮人と誤認されて福田村と田中村（現在の柏市）の自警団に襲われ、幼児や女性を含む9人が殺害された。のちに福田村事件といわれる日本人誤認殺害事件である¹¹。

（2）流言飛語発生源とその背景

このように朝鮮人とみなせば、有無を言わず殺害するほどに、自警団は集団ヒステリー状態になっていたようである。ではこのように一部の日本人たちをある意味で殺人鬼にまで駆り立ててしまった流言飛語はどのよ

10 今井清一・齋藤秀夫（1975）、14～15ページ。

11 「シリーズ追跡 福田村事件」（2000年7月10日四国新聞）、四国新聞ホームページより。

うにして発生したのであろうか？

関東大震災時の朝鮮人虐殺について長い間、研究を続けている姜徳相氏は、流言飛語の発生について、「横浜発生説」（齋藤秀夫）、「官憲発生説」（姜徳相）、「自然発生説」（松尾尊兌）の三つがあると整理している¹²。このうち最初の横浜発生説と後の二者は次元の違う整理の仕方といえる。仮に横浜から発生したとしてもそれが官権からなのか、自然発生なのかが問題になるからである。

姜徳相氏は、自警団が検問で用いた上述のような朝鮮識別法は、一般人が知り得ないものであり、それが利用されたということは、特高鮮人係などによりこれが流布されたことを示しているとしている¹³。これに対して野牧雅子氏は軍隊・警察の交通・通信網が壊滅状態になっているなかでデマ工作など出来ないとして、「官憲発生説」はあり得ないとしている¹⁴。しかし、軍隊・警察の回復力は早かった。通信網は地震発生2時間後に中野の軍用鳩によって宇都宮、神奈川、藤沢、小田原、千葉、横須賀などの軍機関と連絡網をつくり、警視庁と陸軍省の間も中野の有線隊によって午後3時40分頃には連結されたという¹⁵。一般の通信・交通網が断絶した中で、軍と警察の通信網が唯一の頼るべき情報源であったといえる。官憲が意図的にデマを流したかどうかは分からないが、軍や警察が風評の流布に一役買ったことは明らかである。すなわち、大阪朝日新聞は9月4日の記事で、「神戸に於ける某無線電信で三日傍受したところによると、内務省警保局では朝鮮総督府、呉、佐世保両鎮守府並に舞鶴要港部司令官宛にて目下東京市内に於ける大混乱状態に付け込み不逞鮮人の一派は随所に蜂起せんとするの模様あり、中には爆弾を持って市内を密行し、又石油缶を持ち運び混乱に紛れて、大建築物に放火せんとするの模様あり、東京市内に於いて

12 姜徳相（2004）、21～24ページ。

13 姜徳相（2003）、63～65ページ、および姜徳相（2004）、25ページ。

14 野牧雅子（2002）、62～63ページ。

は極力警戒中であるが各地においても警戒せられたしとあった」と「不逞鮮人の不逞活動」を報じている。そしてこの情報源が内務省警保局であることを明らかにしている。情報源が官憲だということで、新聞の読者は、その情報が確かであると考えたに違いない。

流言飛語がどのように発生したかについてわたしは専門家でもないの
で、これ以上詮索はしない。とにかく流言飛語が地震直後から震災地一帯
に短時間に広まったことは事実である。ここで問題にしたいのは、どうし
てそうした風評が容易に多くの日本人に受け入れられ、そして一部の日本
人を朝鮮人殺害にまで駆り立てたのかとすることである。

第一に、日本が1910年に朝鮮を併合して植民地化してから多くの日本人
の間に朝鮮人を劣等民族と考える朝鮮人蔑視が広がっていたということが
考えられる。日本国内で目にする朝鮮人の多くは、前述のように「人夫」
「土方」など単純肉体労働者であったから差別意識を強めこそすれ、弱め
ることはなかった。第二に、これがより直接的な背景をなしたと考えられ
るが、関東大震災の4年前、1919年3月から4月にかけて、朝鮮全土で繰り
上げられた三一独立運動に対する日本人の反応である。三一独立運動は、
当初「独立万歳」を叫ぶ、平和的示威運動であったが、地域によっては駐
在所などを襲撃するなど、暴動の様相を呈することもあった。こうした朝
鮮の状況が日本に報じられることによって、多くの日本人は、朝鮮人は反
抗的だという認識と朝鮮人への反感が強まったことが考えられる。

三一独立運動でもっとも衝撃を受けたのは日本の治安当局であった。併
合直後の植民地朝鮮では、武断統治といわれるほど、徹底した支配がおこ
なわれていた。そうした強権的な統治に反発して三一独立運動が起こった
のであるが、治安当局が衝撃を受けたのは、この抗日運動がきわめて周到
に準備され、3月1日を期して、京城（現ソウル）、平壤、開城など主要都
市で一斉に開始され、しかもその後、約二ヵ月間、朝鮮全域に拡大したか

15 今井清一・齋藤秀夫（1975）、28ページ。

らである。このことが治安当局者の朝鮮人に対する警戒心を一層強めることになったと考えられる。

実は関東地震発生時、治安責任者として陣頭指揮を執った水野錬太郎内務大臣や赤池濃警視總監は、三一独立運動時、それぞれ朝鮮総督の政務總監と警務局長として在任していた人物でもあった。これはあくまでも状況証拠的な推察であるが、三一独立運動を現場で体験した彼らが、関東地震に直面した時、地震の混乱に乗じて朝鮮人が反抗的な活動に出るかもしれないと危惧して対応策を考慮したことは考えられることである¹⁶。

ともかくこのように、当時の日本人のなかに朝鮮人に対する蔑視と反感が醸成されており、根も葉もない流言飛語を鵜呑みにして、朝鮮人を捕らえて、まるで人とも思わないで平気で殺害するという挙に出たのだと思われる。

おわりに

未曾有の大地震によって14万余の死者・行方不明者を出した関東大震災は、それ自体悲惨な出来事であったが、他民族への憎悪の存在が九死に一生を得た人々まで惨殺するという悲惨という言葉では言い尽くせない事件を引き起こしたのであった。

いったいこのとき朝鮮人が何人くらい殺害されたのか、もっとも少ない調査結果は司法省調査で275人、もっとも多いのが独立新聞調査（在日朝鮮人学生などによる調査）で6,661人である。吉野作造調査は、2,613人とこの間で、他のいくつかもこの間の数字を出している。一般によくいわれる朝鮮人犠牲者6千人余という数字はもっとも多い独立新聞調査によっていえるといえよう。姜徳相氏や山田昭次氏は、これら犠牲者数の検討をしているが、調査当初から官憲による妨害、隠蔽工作があったことを指摘し、

16 姜徳相前掲書（2003）、284～285ページ。

いまでは到底、正確な数字を把握できないとしている¹⁷。

問題は数ではない。もちろんいろいろな検証を経て、できるだけ正確な数を把握することも必要だと思う。しかし、仮に数が少なかったとしても関東大震災時にこうした悲劇が起きたという事実には変わりはない。いったい、殺害された一人一人は、どんなにか無念な思いで死んでいったことであらうか。

このような悲劇は二度と起こしてはならないであろう。そのためにいくつかのことを肝に銘じておくべきだろう。

第一は、他民族に対する敵愾心、反感をあおるような情報にはじゅうぶん警戒する必要があるということである。ここ最近、中国や韓国での反日運動が報道されて、一部の人々がこれに対応して反中、反韓の主張をするようになっているが、わたしはとても気になっている。もしこれが周到に反中、反韓感情を日本人の心に刷り込むことを意図しておこなわれているとすれば恐ろしいことである。意図していないとしてもその影響は望ましいものではない。

第二は、ある民族に属しているからと言って個々の人々を十把一絡げにして特徴付けすべきではないということである。確かに各民族にはそれぞれ文化的特徴があり、そうした属性をその民族の人々が持っているという面もある。しかし、例えば同じ民族の人々でも人なつこい人もいれば、そうでない人もいるし、よい人もいれば、悪い人もいる。実に多様な個性を持っているのである。震災後に悪さをした朝鮮人もいたかもしれない、しかし、それは日本人の中にもいたはずである。朝鮮人だから不逞を働き、日本人だから不逞を働かないなどということはいえない。ある民族だから、こうだというようなレッテル張りにはじゅうぶん注意する必要がある。

要するに排他的なナショナリズムを克服していくことが大切だと思う。もちろんそれは日本側の努力だけではなく、すべての国々で目指さなけれ

17 姜徳相前掲書（2003）、227ページ、山田昭次（2003）、211ページ。

ばいけないだろう。

関東大震災時に体を張って朝鮮人を自警団に引き渡さずに保護をしたという鶴見署長の大川常吉氏のことは最近、かなり有名になっている¹⁸。大川常吉氏がどのような心情で朝鮮人を保護したのか分からないが、ほっと心休まるエピソードである。これ以外にも顔見知りの朝鮮人をかくまってあげたというような話も結構あるようである¹⁹。

日本人達が具体的な朝鮮人の人となりをもっと知っていたり、友好的な関係がもっとあったりしたなら、簡単に朝鮮人を殺害するなど言うことは到底なかったであろう。そういうことを考えると近隣諸国の中国・韓国などをもっとよく知り、交流を拡大していくと言うことがこのような悲劇を二度と起こさないために重要なことだろうと思う。

(追記)

本稿は、本学で開始された教養ゼミAの授業（2005年度）において、教員の学問背景を紹介する意図で話をし、その後、論考としてまとめたものである。この授業は、入学したての一年生を対象に文科系、理科系の学生も一緒になって、大学における学びの「問題発見からレポートにまとめるまでの主体的な学習に必要な一連の技法」を習得することを目的にした授業である。この論考をまとめたのは、レポートの一つの形を示そうというためでもあった。書き上げたものは、担当したクラスの学生には配布して、レポート作成の際に形式上の点で参考にするよう指示したが、公刊せずに眠らせていた。

今回、木下芳子先生が退官されるにあたり、この一文を記念論集に加えさせていただくことにした。木下先生はテニス好きで、昼休みや土曜日に

18 大川常吉氏の事績については、「関東大震災で朝鮮人救う、元鶴見署長の碑に献花」（朝日新聞2003年10月4日朝刊神奈川版記事）などを参照。

19 今井清一・齋藤秀夫（1975）にそうしたエピソードがいくつか紹介されている。

テニスで一緒にさせていただいた。パートナーを組んでダブルスの試合も随分とやらせていただいた。研究分野が異なるが、記念論集に加えさせていただいたのはこのためである。感謝の念を込めてこの一文を掲載したいと思う。そして木下先生には退官後も研究だけでなく、健康のためにもテニスに一層励んでいただきたいと願っている。

【参考文献】（本稿で直接言及したものに限る）

（単行本）

- ・横浜市役所市史編纂係編（1927）『横浜市震災誌』第4分冊（1927年）
- ・今井清一・齋藤秀夫（1975）『歴史の真実 関東大震災と朝鮮人虐殺』（現代史出版会、1975年）
- ・梶村秀樹（1983）「在日朝鮮人の生活史」（神奈川県企画調査部県史編集室編『神奈川県史 各論編1 政治・行政』1983年）
- ・神奈川新聞社会部（1985）『日本の中の外国人「人差し指の自由」を求めて』（神奈川新聞社、1985年）
- ・野牧雅子「関東大震災朝鮮人虐殺説への重大な疑問」（『現代コリア』第419号、2002年3月）
- ・姜徳相（2003）『関東大震災・虐殺の記憶』（青丘文化社、2003年）
- ・山田昭次（2003）『関東大震災時の朝鮮人虐殺—その国家責任と民衆責任』（2003年）
- ・姜徳相（2004）「関東大震災八〇周年を迎えてあらためて考えること」（『朝鮮史研究会論文集』第42集、2004年10月）

（その他）

- ・「171万人なお支援が頼り スマトラ沖大地震・津波から3カ月」（朝日新聞 2005年3月26日）
- ・消防庁「阪神・淡路大震災について（第107報）」（2003年12月25日）

- ・「シリーズ追跡 福田村事件」(四国新聞 2000年7月10日)
- ・「関東大震災で朝鮮人救う、元鶴見署長の碑に献花」(朝日新聞2003年10月4日)

(インターネットウェブサイト)

- ・フリー百科事典 ウィキペディア

<http://ja.wikipedia.org/wiki/>

- ・東京管区気象台「関東地震の記録」

http://www.tokyo-jma.go.jp/sub_index/tokyo/jishin/kantou_jisin.htm

- ・鹿島マンスリーレポートダイジェスト「関東大地震を知る」2003年9月

http://www.kajima.co.jp/news/digest/sep_2003/tokushu/index-j.htm

- ・阪神・淡路大震災関連情報データベース

<http://sinsai.fdma.go.jp/search/>